

## 太陽のそばで (※1)

高普第30回卒 大谷 光明 (※2)

空に太陽があるように、俺にも友人達がいる。今晚も先輩の店に集まって、まずは、酒を真ん中にして、日頃のたまりたまった鬱憤や欲求不満をきついジョークに絡めて吐き出す。今晚は特別な相談があるというのにだ。それでも君はいやな顔もせず聞いてくれる。そんな君に、俺はいつも甘えている訳だ。お互い様ならいいんだけど、弱くなった酒を嘆きつつ、明日の朝に反省する気だ。

そういえば、あの時も、俺のわがままをみんながつき合ってくれたっけ。ふとした思いつきで始めた募金活動だった。一緒にいたのが、この仲間達だった。今思うと、俺ら、単に学園祭の思い出づくりだったのかもしれないな。3年生の1学期という大事な時期に、受験勉強そっちのけで、放課後廊下の片隅にたむろしていた。募金を呼びかける看板を書いたり、募金箱を作ったり、学園祭に配るビラを印刷したり、大切な時間を共有していたっけね。当日は、雨に濡れながらも校門前でビラも配った、人前で大きな声も出した。みんな初めての経験だった。仲間達は気持ちよく一生懸命だった。

そうしてその後、この活動が俺達の思いを遥かに越えて大きな活動に発展していったっけ。隣の女子高のサークルを巻き込み、一つの社会活動になっていったことは、その後の俺達にとって大きなワンステップになった。それより何より、普段クラスに女生徒の愛しい匂いなど全然しない普通科の野郎どもにとっては、淡くほのかな期待を持てる機会が舞い込んできたことは、一番の収穫だったに違いないのだ。活動の拠点にと借りた街中の古い事務所には、いつもあの放課後だけが楽しみだという顔がいっぱい集まっていた。

そうして、世間の迷惑をよそに、夕方遅くまで青春していたよ。クライマックスは、筋ジストロフィー症の若者の生き様を描いた「車いすの青春」という映画の上映だった。昼夜2回の上映で千人もの市民に見て頂けたことは、まさに活動に参加したみんなが力を合わせて頑張った大きな成果だった。誰にやれと指図された訳じゃない、俺ら自身の自主的な活動だった。だから、あれだけの成功をみたのだと思う。

こんなふうには、あるものに情熱を燃やした時間を共有し、友情を深めあった仲間が、俺にはいる。だから今ここで、君の愚痴を肴に酒を喰らっている訳だ。心の底から言いたいことを言う。そこで、時として喧嘩にもなるが、それもまた酒の肴にしてしまうのがこの仲間、あの時の仲間なのだ。

今週の土曜日は、Nの結婚式だ。あいつはあの時、ある女生徒の前で妙に張り切っていたっけ。披露宴の友人の出し物は、Sの「大黒舞」と「かごうま」だ。つつこみは先輩、TとHは新婦側の席を回って酒を注ぐ。YとKは新郎側だ。君は、小道具準備。俺は真ん中の席を回って酒を喰らう。あいつのよき日には、ぶっ倒れるまでやるぞ、という具合に話がなっていく。だから、仲間はいい。

あいつらとは、喜びも悲しみもいつでも共有出来る。この先も、この友情はきっと変わらない。そして俺は、君の目尻のしわの本数と、その深さをよく観察しながらやっていく、空に太陽があるかぎり。

(※1) 「相中相高百年史」1998(平成10)年7月6日発行、「思い出の記」より。

(※2) 昭和53(1978)年卒、鹿島出身

(転記&amp;※脚注 村山)